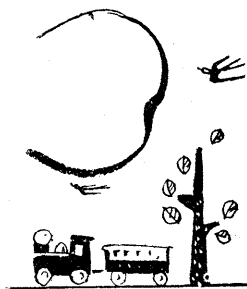


# フレーベル以後の幼稚園

新教育による保育の実際面の変化



—〈11〉—

津 守 真

今まで述べてきたように、幼稚園の教育は十九世紀末から二十世紀初めにかけて、大きな変化を示したのであった。それは字句の末梢に拘泥したフレーベル主義から、再び児童そのものに立ちかえって、児童そのものに焦点をおいて、教師も児童そのものに学んでゆくことが強調されたのであった。

この間、新しい教育を推進させようとする幼稚園の進歩主義陣営と、これに反対する保守陣営との論争を少しく紹介したのであったが、これはただ単に理論上の論争であつたのみでなく、保育の実際上も両者に相違があつた。理論上でさまざまのことが論議されても、教育の実際には殆ど変化がないというような場合もよくあることであるが、この場合には教育の実際面にも一つの転換期であつた。少なくとも全般的に見れば、その以前と、その以後とでは実際保育の上に種々の変化が見られたと考えてよからう。

それでは新教育によってもたらされた実際上の変化とはどのようなものであり、またそれは、現在の状態とどの位違つたものだったのであろうか。

過去の保育の実際上の具体的なことを知るのは、きわめて困難なことである。理論上のことは書物を通して知ることができるが、実際上のことは文書にして残される面も限られるし、理論的な面の考察よりもむしろ困難なことである。

その当時を経験した存命者の記憶に頼ることもできようが、

その場合もその人個人の経験の範囲のことに關してはかなり確実な資料となつたとしても、それがどの程度全般に通じて云えることかということになると、あいまいになつてしまふ。そこで實際上の資料が組織的にのこされていない場合には、過去の實際のありのままを知ることが大へんに困難な仕事となるのである。

幸いなことに、幼稚園保育の實際については、米國でちょうど新教育が軌道にのつて動き始めたころ、すなわち、一九一〇年頃より一九二五年頃に至る十数年の間に、全国各地において、多数の組織的な調査が行われた。それは、幼稚園がいかにか新しい原理にもとづいて、實際保育を改良しているかを知ることを目的として行なわれたものであつて、ある場合には市單位に、ある場合には州單位に、公の機關によつて行われたものである。そして新教育の原理に照して、満足すべき状態にないことが発見されたときには、改良すべき点を指摘、勧告されたものであつた。

それらの相ついで行われた調査は、大たい一九二五年頃に終りを告げる。それは、ちようどその頃をもつて、新しい教育が幼稚園にほぼ普及した時期とみなすことができる。その後なほ、幼稚園の教育原理は、児童心理学の進歩とともに少しづつ変化し、その實際も改良を加えられて今日に至るのであるが、基本的には今日の保育の實際上の基礎は、この時期

に樹立されたと考えてよいのである。そして保育の實際面は、この新教育運動の際に示された変化ほどの変化を、その後には示していない。

いまこの旧教育から新教育への轉換期における幼稚園保育の實際を、これらの調査に示されたところにもとづいて、簡単に眺めてみよう。それによつて、その頃、實際面において何を變えようとしていたか、その方向をうかがい知ることができよう。(註一)

#### (一) 保育室及び設備材料

保育室にはそれまで恩物用の机がならべられ、採光条件等も悪く、学校の教室のような觀を与えていた。「しかし次第に保育室は明るく塗りかえられ、絵画をかけ、植木鉢など並べて、見るからに楽しい家庭のような雰囲気となつた。」「学校と併設の場合には、しばしば幼稚園の保育室は、学校の中で一番魅力的な部屋となり、美しく趣味豊かに裝飾をし、採光換気もよく整えられた。多くの保育室がこのように整備されたが、あるものは明らかに幼児を教育するのには不適当な部屋であつた。諸調査を綜合して大体三つの型の保育室に分けることができる。第一は、大きな採光条件の良い部屋であり、じゅう分にひろい脱衣のための空間と、近代的な子ども用の便所がついているもの、第二は採光条件はかなりよく、

ともかくも子どもの洋服かけが備えてあり、便所もついている。第三は、保育室以外のものに使用しても殆ど役に立たないような旧式の部屋である。

公立小学校に幼稚園が併設され始めた初期においては、幼稚園は継子扱いであり幼稚園のためには一番悪い部屋があてがわれるのが普通であり、右の第三の部類に属するものであった。

設備の中で一番変化したものは、机である。幼稚園における子どもの活動に關しての教育論が變るとともに、さし當つて机はまず変えなければならなかった。「個人個人で仕事するため小さな机は、共同の大きな机にかえられた。それとともに衛生面について特にいろいろの注意が払われた」「だがある幼稚園では尚、机を先生の方に向けて並べているところもあった。」また動物や植物を、保育室に必須の備品とするよう勧告されたところもあった。

材料も、進歩主義教育と保守派の人々とはかなりの相違を示した。「進歩的な幼稚園では、滑り台、ブランコ、シーソー、よじ登る棒や綱などがあつた。」あるところでは、明らかに材料は旧式であり、伝統的教材（恩物）だけしか備えてなかつた。そのような場合には、常に「大きな積木と、各種の長さの板が加えられるように勧告された。それは子どもたちが、自分たちで家などをつくつて遊べるようにするため

ある。」一般的に云つて、遊びの材料はまだ不足し、不適當であつて、場所によつては、戸外の遊び場が全くない所もあつた。しかし他方、材料や設備は最も近代的なものを使用しながら、その使用法に關しては全く古いやり方をしていゝところもあつた。多くの調査が一致して批判していることは、大きな積木のないこと、構造的な活動のための材料の足りないこと、大きな道具を使うための材料の足りないことであつた。大きな筋肉を働かすために、木工材料や大きな描画材料が必要なことが、次第に認められてきた。「しかしすべての幼稚園の材料を、直ちに新しい材料と切りかえることは實際的でないので、当座の間、毎年各幼稚園にいくらかずつ、新しい設備材料を購入するように、特別予算を組むこと」がある調査では勧告されている。

#### (二) 保育の方法とカリキュラム

進歩主義教育の初期においては、ある幼稚園では、進歩的な教育方法が満足に行われていたが、ある幼稚園では、カリキュラムに対する考え方は偏狭であり、融通性を欠いていた。「あるところでは、先生と子どもとの關係は相互に理解があり望ましい關係であつたが、あるところでは、子どもはピアノの音に自動的に反応するように訓練され、また先生が子どもの注意を喚起するために人工的な方法が工夫されていゝた。」

時間区分についても、進歩主義幼稚園は、伝統的な学校のような厳格な時間割を破り、むしろ個々の子どもに時間を合わせてゆくことにとめた。しかし多くの幼稚園において、この過渡期には尚時間区分は厳格であり、その点について多くの調査が鋭く批判している。「幼稚園の一日を勝手に小さな部分に区切ることは、良い仕事や思考の習慣の発達を妨げることになる。」

新教育の過渡期のこの時期においては、いろいろの経験のどこに重点をおくかということに関して、必ずしも人々の意見の一致を見ることができなかった。その結果、ある経験は重視し、ある経験は軽くみるということが起ったのである。例えば、読み書きについては、ある人々は「特殊の場合以外は全く教えるべきではないと考え、又ある人々は、「学年末に、一年生に上る直前に、読むことの下準備の訓練として多少訓練することが望ましい」と考えた。またある人々は、「最も年長の組の最もよく発達した子どもに限って、自分の名前を書いたり、自分の経験の範囲の中のもの、名前などを綴ったりするような組織立った経験をすることが望ましい」と考えた。この問題はその後児童心理学の研究を経て、解決されねばならぬものだったのである。多くの教師たちの疑問や関心の的は、自由と秩序とをいかにして調節するかということであった。また、一つの組の中で三つか四つのグループ

に分れたときに、子どもたちをどのようにして指導するかということであった。子どもたちを、どのようにしたら知的に自由な雰囲気の中におけるかということは、多くの教師にとっ てきわめて困難な解決すべき問題であった。

これらの調査の範囲では、カリキュラムの問題は各幼稚園において必ずしも未だ解決していない。その後、一九一九年に、国際幼稚園連盟の編集により、新教育の原理にもとづいて標準カリキュラムが作成され更にその後いろいろの検討を経てゆくののであるが、この点は次項にゆづることとしよう。

### (三) 組織 組編制 二部制保育

一組の人数・ある調査によると、一組平均三十二人の子どもが一人の先生によって保育されており、それは二十五名にまで減すべきことが勧告されている。学校当局は、一人の先生につき十五名あるいは二十名が理想的な数であるが、二十五名くらいまでは増してもよからうと同意している。時に一組、五十名以上も收容されているところもあった。これはたとえ、数名の先生が担当したとしても無理な人数であると結論されている。この人数の調節は、次の二部制の問題と大きな関係をもっている。

二部制発展の経緯・右の一組の人数の問題はかなり大きな問題であった。またそれはひとりひとりの子どもに適応させた教育を実際に行ないうるかどうかということをきめる重要

な条件でもあった。多勢の子どもをそのまま収容するには、二部制にせねばならぬ。ここに二部制の幼稚園の問題の端緒があった。歴史的には二部制保育は、すでに一八七五年に、セントルイスの公立幼稚園においても試みられている。そしてその後、一九〇二年から六年の間に急激に増加しているのである。その当初において、国際幼稚園連盟は、二部制保育に強い反対の態度を示した。その理由は、第一には、六歳以下の幼児は、午後よりも、午前中の方が落ちついた仕事ができること、であった。二部制にすれば、より多くの子どもを収容することができるとしても、朝の中に五時間も六時間も遊んで後に幼稚園の指導をうけても、それがどれだけ身になるだろうかというのがその論点であった。第二の論点は、教師が一日に午前と午後と二つの組を受けもって指導することができようかということであった。教師は、身体的にも精神的にも、二回の保育には耐えないであろう。あるいは、二回目には教師自身も新鮮味を失ってしまうであろう。また午前の組を本当に指導しようとするならば、午後は家庭訪問や、その他の計画に、また自分自身の教養のために費さなければならぬであろう。

一九一六年、この問題に関する質問紙が米国内の九十二の都市に配られた。その調査によると、大都市においては、幼稚園が公立学校系統に統合されて直後より、二部制保育を己

むなくされていた。その長所短所を考量してみると、この調査においては、二部制保育に賛成意見の方がはるかに多かったのである。その長所は第一には、二部制保育にすれば、一組の人数が少なくてすみ、したがってより自由な保育を行なうことができる。子どものグループ指導も容易であるし、子どもが個性を発揮する機会も多いということ、第二には、二部制保育によって、より多くの人数を教育することが可能であり、費用も少なくてすみ、ということであった。こうして、二部制保育は、米国においては、当然のこととして受け入れられてしまったのである。

#### 註一

- Waite, M. G.: Kindergarten in Certain City School Surveys  
U. S. Bureau of Education Bulletin, 1926 pp. 44
- Davis, M. D.: Kindergarten Primary Education.  
U. S. Office of Education Bulletin, 1930.  
No. 30, 1~41
- Abbott, J. J. Kindergarten Education, 1920-1921  
U. S. Bureau of Educat. Bull., 1924, 1~13